

知識を再構成する機会

熊本保健科学大学教授 吉永 秀

本日は、多くの皆様にお集まりいただき、長時間にわたってこのシンポジウムにご参加いただき、誠にありがとうございました。また、子猫「トラ」を助け、スタート台を提供した本学看護学科二年次の江原、鮫島、布川、鳩石の皆様と、この子猫をその後引き継ぎご家族の皆様すべてが参加して面倒を見ていただきました本学の石原事務局長にはトラのその後をご報告いただきました。この報告から分かったことはこれらの行動が単に「野良ネコ」を養ったというのではなく、責任を持って最後まで面倒をみたということで、この件は本学の学生・職員の優しい気持ちがり然発露し、多くの人々の共感と支援を得たことを示し、一服の清涼剤となったと感じています。

また、このような出来事を単なる美談に終わらせることなく、この経験を大学の内外で共有するという目的で、小野学長により大学らしいシンポジウムが企画されました。

まず、本学の森本教授（解剖学）により、ネコを科学的に系統樹のなかでの位置付け、イエネコとしてヒトに飼育されるようになった約八千年まえの状況からスタートし、私もがほとんど知らなかったネコの特性を明らかにしていただきました。このような基礎的で、系統的な知識は、それ自体ではなんらかの役には立ちそうにありませんが、このような正統的な知識から、応用は生まれてくるものです。

次に、本学の松尾教授（微生物学）により、ネコと関連した人畜共通感染症、とくにトキソプラズマとトリインフルエンザについてその怖さ、十分な知識があれば防ぐ方法があることを教わりました。とくにトリインフルエンザは現在のところヒト―ヒト感染がなく大流行は起こっていませんが、このウイルスはネコに強い感染力と致命力を示し、もし大流行が起これば惨劇が予測されることを知りました。また、ネコからヒトへと感染する感染症について皮膚病を中心として井上講師（熊本大・皮膚科）に教わりました。厄介であるが致命的ではない疥癬、真菌感染症のような疾病。一方では、ネコに噛まれて感染し、時に致命的になるパスツレラ症など感染の実態をお示しいただきました。これらの現実に関立つ知識はネコを飼うことには十分な知識がなければ危険なことも起こりうるが、知識を活用すれば危険を避けることもできることを学びました。

最後に熊本市動物愛護センターの久木田所長には人類と最も長く接し、コンパニオン・アニマル（ペット）となってきた追跡型のイヌと待ち伏せ型のネコという二種の動物の飼い方、とくに責任の持ち方を教えていただきました。この問題はコンパニオンとして動物と付き合う人の心の問題であり、とくにネコは野良ネコ化した場合に対応が難しく、これを「地域ねこ」として育てていくことの重要性に関する認識がやっと始まったばかりであることが理解できましたし、この問題についてしっかりと対応しなければ、イヌ、ネコの方よりも、むしろ人の心に大きな問題が生じることがよく理解できました。

本日のようなシンポジウムはまさに大学であるからこそ企画できる知的交流であり、一見、役にも立たないような基本的な知識の集積が問題解決に重要であることを知るよいテーマとなった

と思います。例えば森本先生から教わりましたように、ネコは農耕が始まり、穀物の蓄積がなされるようになったころから「リビアマヤネコ」という野生種を飼いならしたものであるという見から出発すれば、このネコが肉食であることが理解できます。飼い主が長い間「魚食」が主であった日本ではネコは魚好きで、肉はあまり好まないという誤解が生じていること、水はあまり多くは必要としないし、水は嫌いであることなどを演繹的に考えることが容易になってくること、久木田先生から教わったネコに処罰を与えるときには「水」をぶつ掛けることが効果的であることなども理解できました。

今から十年以上も前に、大阪港で「セアカゴケグモ」という、日本にはいなかった毒グモが発見されたときのことを思い出しています。その時もこんな日本にいないクモのことについても、よく知っている専門家がいることを知り、大学というところは面白いところでどんな分野の専門家もいるのだと感心いたしました。今回のネコの問題なども皆で勉強をし、知識を再構成する良い機会となりました。学生諸君も知識を広げる場合、好奇心を常に失わず、役に立たないように見える知識も十分ネットワークを駆使して利用できて、知的成長がなされることを、このシンポジウムから学んでいただきたいと思っています。

最後に、このような見事なシンポジウムを企画された小野学長、会の運用をお手伝いいただいた本学企画課の今村課長および編集作業に携わっていただいた勝木康子さんをはじめ課員の皆様に感謝いたします。